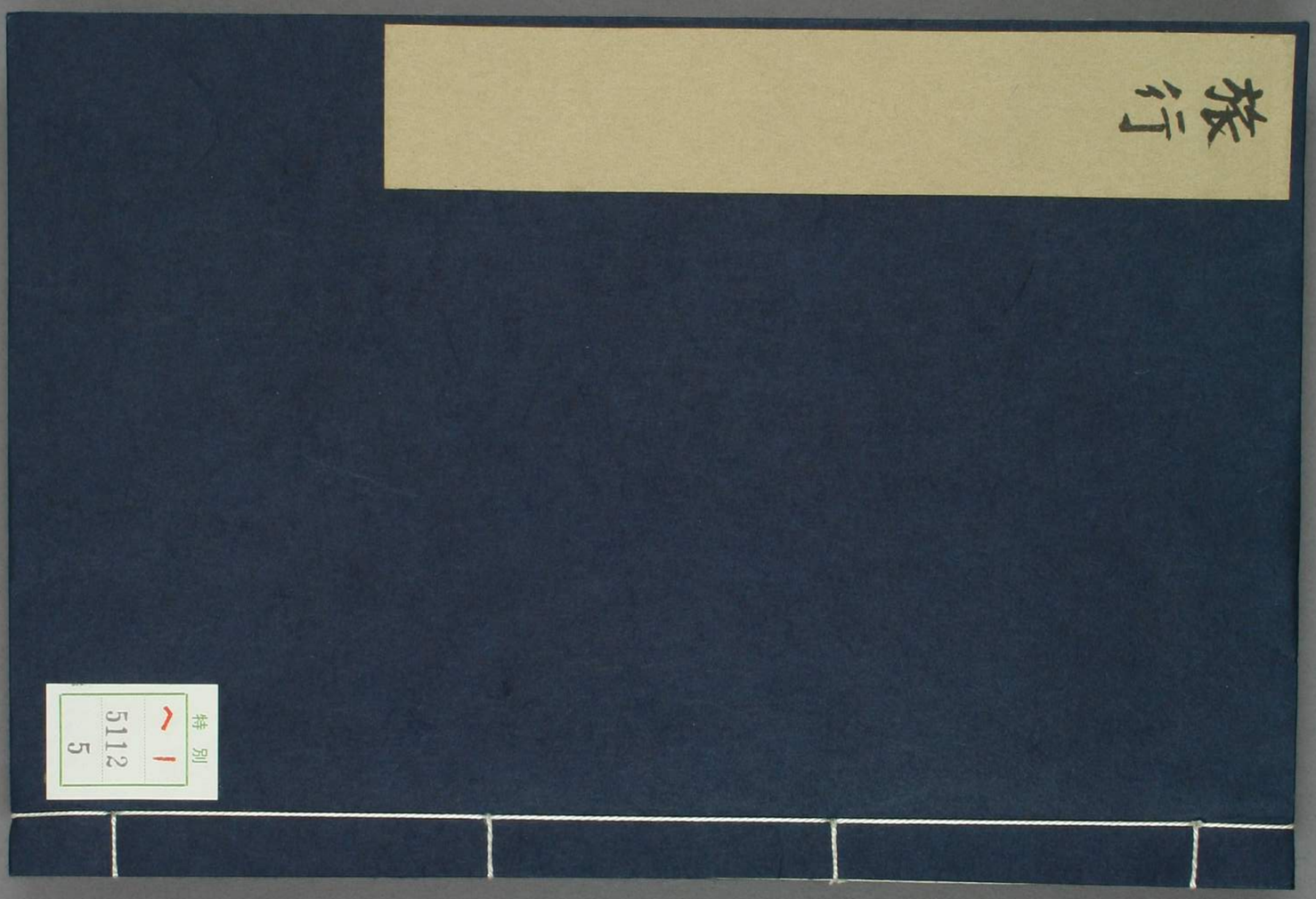


特別
〉一
5112
5

明治三十四年九月三十日
延壽集　第十二号

月中子の此文を読で人間を嘆ぜざるを煩悩の業障尚ほ去る能はざるを快楽とす又今日中子の目的の人生最も快楽なりと

余が聞り此妻君は東京に出たがり居られ一度銀座の繁きを知らぬ田舎人子旅行に於てをや北海道に好飯を重ねりて左手三十六歳まだ一日も欠かずと此月中子の寿考まで祈るべくるのみ

旅行

月中子

世の中に最も自然にして純潔に最も高尚にして清浄なる快楽い好敵と旅行に如くいなし。苟くも健全なる胃腑を有てる人にして誰か厨下の芳味を無量の快楽と感せざる者ぞ。破裏に あんさん外に天爽の西脚を載せ誰か旅行を嫌ふ人ぞ。実に人間に此西省の嗜好を満足せしむるの欲望ほど故に蜉蝣の生命殊に惜しき心地さらる凡て此西省を枯燥蒸熱せる人生の莱山島 沈土くと云ふも不可なる抑も人世の前進に伴れ社會百般の事物舊態を改め人類の本性も種々の影況に左右せられ事実なれども独り此西省の嗜好に至ては古今一轍所謂稟性くるのみ

明治三十四年十九月三十日
延寿集　第十一号

旅行

月中子

世の中に最も自然にして純潔に最も高尚にして清浄なる快楽は好飯と旅行とに加くはなし。苟くも健全なる胃腑を有てる人にして誰か厨下の美味を無量の快楽と感せざる者ぞ。破裏に一銭の外に天爵の西廊を蔵せる者誰か旅行を嫌ふ人ぞ。実に人間に此両者の嗜好を満足せしめむとの欲望なる故に蜉蝣の生命殊に惜しき心地さらるれば此両者を枯燥蒸熱せる人生の莱蕪沃土と云ふも不可なる勿れ。抑も人世の前進に伴れ社会百般の事物諸能と改め人類の本性も種々の影況に左右せられ事実なれども独り此両者の嗜好に至ては古今一轍所謂禀性くるのみ

人間の目的は旅行と食事まで極まりて極まりぬ

月中子の此くまで人間を離れ人間を避くべきなる煩悩の業為尚ほ世味を貪りて之を得ざるは又今日の目的の人事の如き

余を離れ妻子は東京に生れたれば一度銀座の繁きを知らぬ田舎人子旅行に於てさや北海道好飯に至りて全く三十六歳まだ一日も欠かずとく吐月中子の矣孝まで知ることを要す

40-9032

月中子の如く去て一座無常の感
迫れば皆人間の運命を含み
ひとり世間の世界に輝き
輝きぬ

の後にて存せるものく去れい人間の運命人生の帰着なるべし
数岐の本源を此不変の稟性の内に看出さるゝ者も知らるゝ
此稟性より人生に少なからざる影響を及ぼすものなりの余今殊に旅
行に付云々せんとするに此稟性を窮め深く人生との関繋を考へ
せんとにあらず唯思付ける儘旅行の能を説き兼て人心に及ぼす影
響の一端を挙げ世の大思想家の一笑を買むと欲するのみ
凡そ物の功能は他と対照比較せゝ隠て益〻著しく現ぜるなれ
い先つ旅行せざる時の有様より説き始め人間最も事物
に馴染み易く又拘泥し易き者にして或る歳に日を送り月を累
ねまを仰ぐ内に其土地の気候風土人情習慣等に無感覚となり
終に史上記憶せるに足る出来事や人生の変遷等に感動せざるを
猶日々往来せる道を自つと辿り行くが如く淫猥残酷の中

月中子は社交を厭ふことを厭ふものなれば
旅行といふことを厭ふものなれば
ことに於ては然り愛子云
の句い旅行といふ文字
を仮りるまでかはらず
意味は世間へいだ一他
人文隆を世せるといふ
ことにて旅りし年御
其内を信じてものと
言い節訳す
赤水まで書きれ水ど
下の文はトンチンカン
なれども所存す

に人と為れる者自つと淫猥残酷の事に注意せざるに至り「夕旦の
鐘の声教誡為業と響けども聞て聞ず」なきが如く久しく清
滞せる池水の風激しても泥沫漣波清らもして直く其息気
や鼻を撲つ若し之を清浄ならしめむには流を決し新しき水を
入るゝに如くなし——諺に言ふもの可愛子に旅をさせよと之れ強ち
世の中を知らしめよとの意に非ず旅途の好経験を賞知せしむ
よりも非ずして他に出づる〻郷里郷黨より遠ざけ思想の流通を
甚しく新鮮快活ならしめよとの意義なるべし如し人々已に
郷里に居て注く涙を甘露となりて其里に降り頻り他郷にて
注く涙は霖雨となりて郷里を浸し父母の身をい溺らしもやせむが
さりとて故郷に居るも何日晴ることもなき春雨に鎖され海
業の如く色の優に美しく舞ひなる初花を穢て出つゝ咲も

揃いて葬えばまむしそもやいとを知りて右他人を知れとの言葉
い強ちに廣く人を知れとの意味なれい遠く離れ
て外國の人を知らはやと行く要なしと思ふ（きがさりとて故郷の
風に久しく染りし者ら人の悪らやいとれに知らに難きい一箇の名を
一個の名を疑ひ問ふを能ざるに等しかりしをなりしし我い心地
好しとて涼む夕の秋風に唧々たる百蟲い羽を鳴き搦らし死の苦悩
に瀕むもの楽しい嘻しい憂しい床しと心の夢に我を忘れて居
る瞬間い龍鍼や苦痛に呻吟する人の悲痛の最右の時なるもの
を（蓋に）よりよど思ふ風い彼蒐に死せる人の上に山とも為さむと塵かい
居るを花い何時らい雲間を出つる月い今らと待詫ふる短き葬
の伏屋にさ（死の運命）年い行渡り聽て焉きとて怖しきもの其印證
を捺して行くをよもやよも殘く感じ得らんまじ知る事ま

湖畔子の口調

紡ぐ莊大月中の真に逍遥の境みゑる

して賞味ない感ふに一度健脚を故しく背嚢を負ひ暮れ
い到る處青苔の褥に眠り累々たる果実の美味を漁ることして
澗谷の小石い激し流ふ、自然の水汁に浸しく味ふ毛に至らむも忘も
角旅舎に上らむ時に莊子の所謂省急いものかい躍して造化
弱の住家真如の園に至り得ん
つくしと人間の心身を安まふに驕傲卑恩纖軟柔弱のものな
ら加しく口ひら年宙間凡百の生物の長く靈さと誇称し思想の特
権者へと揚言し他を稟性の低にして進化せも劣等なる器械
的作用を縛ゆとる物に過きにと翻ひ蔵視されとも其本性に潜
り考ふれい斯く云れ得ふ実に之しきら如しく已にのみ知とな仁器と
制して天の致を補りとて強て世の中の事物を得雑混清せし
て人智の発達とうとて所謂劣等なる生物を殘害屠殺し

て食に充て天與の美味と云ふを考ふれば天晴萬物の靈
思想の特權者の実あるを加きも斯く云ふ事いと素人間と云ふ
生物に伴ふ性能の業を見い蟻蟻の冬期地中に駱多の食糧
と共に眠ると云ふ性能と同一かと(独り人類の誇り得き事
と思ひたまふの)の寧ろ不公を欠き自然に特れたる是に蟻蟻に劣
れる様に思ふにあらずや素より無形の理を考究し大拙を測
り神佛と信ぜる特能人類に在ると故に自ら萬物の靈思想の
特權者と云ひ得(きが)愚に斯る能力満てる脳髄を有て
り信ぜるものから事ら益々驕傲却愚繊軟柔弱となる
らかきを悲しむ人果して萬物の靈と思想特權者と云ひ
れ得きられて余の久しく知らまと欲してまい知ることを能はざる所なれ
ど想ふに人自ら萬物の靈と思想の特權者と思ふ時い

日中子の論説なり
(1)人ハ万有の長なり
(2)然ども人ハ驕傲無
(3)故ニ人ハ万有の長なれ

日中子ハ曰ク

思想の特權者ら云ふ
既に千尋の深淵に踊り驕傲となり痴愚となれる證拠
らもや意性の低の生物の如く意性の低に飲食せられ射躯益
繊軟柔弱なり如蜉蝣朝露の短き命をいと短く縮めるを史
の證せる所ならずや嗟乎最も高尚と優等と自由と呼りて
而も最も自然と誇り最も神を頼と便らむと皆輝を仰ぐも
と云ふ人類より最も不思議なる者にあらずいせに愚人程
扱ひ難き者なりとやの若し人の所謂神佛と云ふもの地位より此人類
を視下さい概ね愚人の有様にて住ふ集ふ奇かさかりヴァーの目
に見えず小人島の人々より遥に優りて見ゆるを如何に萬能の神
自有の佛なりとも呆然らるを暫らくして最考等の蠢爾物と
嘆せらるゝ事ならん
且つや人性に概ね憂驚自殺の性向まれいたり春い花見に氣

ちふら〳〵と心落着く間もなく夏を暑さにとさ〳〵氣がふれ〳〵て僅かなる事の端より息の根を我より好むことをもとる秋い何處も物寂〳〵殊に此氣に適ふにや寂寞こそ檐端に傾く月影も飛交ふ落葉にきらめくと映ずと見ては何となく來れ其秋水我が胸にと叫ぶ人と聞くもあるかな〳〵冬つ曙空寒く書さ〳〵泛てかん〳〵と鳴ふ我身の夕の空踈らく〳〵音を立て飛ふ雁声の羽風に〳〵ちり〳〵と霰て來る雪か影見て魂を消〳〵頭撫てい氷ふも又に照〳〵相見ては此自頭をと思い為さむ実にや人ちり狂人なれ氣の靜けき時さらも独り寂〳〵き閉屋の内に籠りて居らい何時の間に何世ちの來けむ巨眼の悪魔伴れ行ちむとて勉むく斯〳〵人性を考觀〳〵悟入徹考〳〵ちむとを好〳〵やしエーキスピアなりきとゝいふとツト、リアーの如き人多きを思

此辺文章妙

ふらん

復雜せる人性より上に二つの例を挙けるが凡そ此等の性向を備れて人さる者の天然に暫時ふに立帰らむと欲しない失つ試に旅行の途に上れの——

人旅行せむと失つ何とら其名目即ち目的あるべし——或る遊山物見とやらにて旅行〳〵或い巡礼お山参りとらにて或い湯治にとて或い債鬼を避けむとて又山川草木を莫測量せむとするもあれい深山幽谷の奇を探らむとするもあるべし人に誘らむとて旅装をもあれい観念とやらを養いむとて途に上るもあり以〳〵人定まれる頃又に彼方此方の旅の箱に泊れる人の身分を見は人様々に目的の色々なる事知られなん又其身分の異なる如く其智慧の度も異なる〳〵目に人並に違いねともいろのいを讀み得ぬ

旅行して天真爛漫なる
ること甚だ疑ひ——
盛りの及ぶの結果なる
すべし——

人中にあり隠れありつらん去れど身を智慧を問はば凡て一度
他郷の土を踏まざる時には知らぬ天真爛漫の人とぶる事
人類の代表者となり造化に對する事人世を顧み觀察する
に適せる地位を得他に無量の快楽を得らるる事余の深く信
ずる所なり

人の思想の変轉万化極りなき事は芋嶽と極楽見とせる例にて
知られると凡そ旅行に於ける程変化せざるなし——汽車馬車
人力車徒歩を問はず一歩住家を離れ旅途に上らば既に我に
あらざるが如く覚ゆるに至り人間として斯く感ず覚ふるは求めず
得ざるにあらざれども勿論深く計畫せる結果にもあらざるも一瞬又一
瞬我に到らんと欲する處に迫つて思想の交代変轉迅
燈籠よりも早く今迄胸にかかる思想忽ち集ては消え

消えて別の思想来たるを知る死期に臨める人の一息の間に過去
千萬の思想を復活消滅せしむるが如く斯くの如くして在来停
滞せる思想後敬一去りて何時の間にか新鮮多望興味を含め
る思想脳中に満ち頭上新鮮爽快なる風颯々として吹くが如き
心地せらるるに至らん我が五官皮膚迄新鮮にして清爽に沁滑に
て興味高の深味を含める様に思はる空氣注入せる時は正しく我
脳裡にも一種の思想天外より飛来——一切の迷夢を掃破——
何故なる疑問を解き出去微妙なる声
様なる時にして如何なる人も其眞相を現ずる事なく而して此思想を最も旅途に感受し易き
ものなれ高樓空に聳え貧乏の夢覆魔次第々々に白壁爛々たる冊
空相映——車馬轔々として轍撃ち人行響々として肩摩す

面白き比喩

此来論ずるが如く断えず旅行する人は
能く家の恩恵を忘れるものなり
たり若し一般の旅行者にして
らば皆世間経験者に
エラキ人たるべき実際を
して古人の大人
面白き比喩
事なり何故も思ひ旅行
八重の五感の快楽
精神の
散々なる
きの天地の
ちなみに
不至
人又
して

さてさてあり難き神代の後の世の事なり即ち我が一種の霊光より奇妙なる方術を我物と視て行のいとなみを自然の動静なき第一の初めとし起源とす故に自然の天然に服従せる初行なれども後世の旅行は つまり作為的の旅行なり 陸放先生八八歳の人間なりしと雖も

とは都に於て見る所〳〵都を離れて依然たる天然の萬象を吹く尽に靡き棚引く雲間に明滅せるを見る〳〵而して都に於ける此技藝的美術的の意匠や唯部外の萬象を模倣せるものにあらで或人人間の技藝的美術的の意匠想像を萬物の感觸よりも遙に廣大無邊なりと思倣せるも余い人類一切の美妙の意匠想像い萬象の変化の一部を僅に模倣現示せるものなりと信ぜ夫れ萬象の変化を造化の現象にして造化の現象を大古より人類をして特化せしめ尊敬せしめ畏服せしめ感歎せしめ賛美せしめ満足せしめたるにあらずや筆捨山の元名なりけるも名畫工をして此の名を尊ばせし凡て造化の萬象の千変萬化なる其驚くべき神に通ぜし誰か空中の唇樓雨間の虹彩を以て無意の現象と為せる人の高樓櫛比せる四衢八街を後に〳〵車

馬の塵外に歩む猶人為の錦繍を脱きて天然の服装を
なせるものとなす〳〵但〳〵余の云ふ旅行とい素より同類異類
と汗せしめ已れ独り金嚢に手を離さず無意虚偽の旅行を
を指せにあらずして見む人知り玉ふ〳〵余い初より無意虚偽
の旅行者に付き変角の罪を作らを好まざりきいとひ寝て旅を
る此種の人とて旅寝とまれい余ら云〳〵種々様々の思想とも
に喜びあるまじけれど旅いお勧め申せども唯虚偽と云ふ忌〳〵
跡を我の神聖ぶる山川に質朴なる村落に年経るに伴れいと繁
く貴きを悲しむも切なきいとをいざ山川の神に明〳〵申さむ神も知〳〵
召さむ一方より見れい人世を虚偽の進化せるものと古人も云〳〵
を想ふに虚偽の世なれいとて古人と燭を秉て夜遊せるものなり
偽を借る真を見る人世を達観〳〵せりとやいま〳〵嗟乎

余と五能く〳〵と誌す

坐初めて虚偽を明せり実のさきの評伝へ興味背折

詩人

月中子の思想ハ千萬れども多からず前後を對照して之を評せんと欲る雅しといへども以下の文の如きハ何人も能く面白くするや妨蕪庭なりおもふに月中子ハ浮究き[redacted]なりけむおそらく子の意の存する他人に感得せられざると

将軍ハ虚偽を以て赫々たる武勲を得政治家ハ之を以て名声疾みに挙り美術家ハ虚偽の頂に想像を飛翔せしむるに随ひ嘆美者益々多く商業家ハ之を巧みに運轉して一瞬に四海の富を握り学者ハ只管に哲学を床し気に繕ひ宗教家ハ虚偽を飾りて我が神佛を益々尊くせる虚偽ハ時を得て今や戸毎に祭壇を得しものを喜ぶ抑も虚偽の斯の如く人之に尊まるゝ所以を考ふるに虚偽と云ふものを譬ふれハ半圓形に等しく人をして其片傍に必ずや未知の半圓形存し兎角する間に全圓形の名を得るに至らしむと思ひしむる故なり余や度量狭く胸に自然の才能なく極めて怯懦なる故に霊場浄界に斯る虚偽者を見るを悲しめて造化ハ四面玲瓏たる寶珠の如く胸宇又頗る廣大なれハ其人ハ如何を問はず一度之に接せる者を勉めて融化せしめざる

此く自然崇拝といふ色あり

く嗚乎身にハ軽裘をなし足にハ草鞋を穿ちて以て自由自在に造化の氣息を身に通はせしめホーマアの跡を追ふて此世を遊歴しわれも又造化と融合せらむともとむるも得むや昔しハハキユールス全く徒歩して昇天せり吾人も徒歩して何ぞ昇天せられざらむやヽ夫天者人之始也父母者人之本也人窮則反本と司馬遷云へりきが余ハ之に對して人たる行業を試みる本に反へらむと云ふもとせ人若し頗る崇高優美の景象に接せる時ハ其景象裏に人間より以上の物住を居るかと思ふ者く而して斯く思ふに至れる遠源ハ深くいはれねど若し探らば頗る興味ある業なりけり夫れ人の已れより多ほに優れる物を礼拝せるハ古今不変の性向人間の天性にして此天性発達して神を拝し佛を尊ぶに至れりされど普通の解く眩れるも崇高優美の景象を見て人間以上の物住めりと思ふ所以ぞ

最も自然に出づる此宗教的の思想の外に今〳〵宗教的思想に基き特に異なる一種の微妙なる勢力を認む（一例）宗高の景象に存せる一種の勢力と驚歎畏敬恐怖の念なる（一例）

岐隙にして怪石累々たる路の左右に蒼松老杉森々として全く日光を遮ぎる加き飛瀑雷の如く半空より下り飛沫四方に散りて霧となり雨となる加き激流雪花を飛ばし雷轟地底に跳る加き霹靂にて雨中に塵埃一望千里荒寒寂寞たる古戦場を行くが如き瀑然たる火煙中天の頂より噴出する加き萬里の波濤青然として寄せらるが如き千尋の碧潭を眼下に望むが如き景象に對して誰れか戦慄し驚歎し畏怖し蕭然たらざらんや亦誰れか渺靄に包まれたる小水の清美幽静なるを見ては歓美の念を起し其の美景を造れる物全く

誠に然り

なりと断言し得る者ぞ鳴呼人間本然の心を動ぜる境遇に接して忽ち其本相を告白せるを照覧鏡の前に立てる妖魔の本相を現ずるが如くなる（一詩人の

The Mission haunt clear spring or shady grove or sunny hill,

とは（一も宗教家の殊に動ぜる境遇を尊ぶべき思ひ宜しくけだし）

余は今此宗高優美の景裏に在る（一人を信ずる物を假りて造化の語を以て呼び人間の之に驚嘆嘆美せる瞬間を造化と人類と融合調和せる時なりと云ふまでも何となれば宇宙の森羅萬象に貫通せる一箇の靈光吾等人類の心靈と互に密接の関係ありて互に異なる所なく而して吾等偶〻宗高優美の景象を見忽ち其裡に潜める神秘不可思議の

物に融合せゝ所以や吾等の心情一切の変化に其景象に遇ふや
否や化〳〵て圓の靈光となりて心情の極端なる驚歎歎美と
云ふ単純潔白なる情緒より直に移りて彼の靈光に冥合
黙契〳〵融化せゝに至らゝ如く思いゝゝ故く抑も如何に不可思
の義にして吾人の「黛色向臨蒼海上泉声遥落白雲中」の
妙景絶境に打ゝふゝ正に言語同〳〵断心行同〳〵滅〳〵て
直に遍遍無礙の所謂造化に融化せゝものと云ひ得〳〵余ゝ
今日の信や斯の如〳〵然れとも此信や全く空想幻影にゝゝ其根底
ゝ〳〵と無きやも又明日の我れ恐らくは今日の我れに及ばゝやも知ゝ
らゝさんとも尚くも旅途に上れゝ人にゝゝ実際に然らゝ悟りゝ
事あり〳〵い斯ならゝ〳〵され人に夾角他の説と容れざる者なれ
い或た難〳〵て云いし真理い何處にても真理なれい殊更に旅行

一言も云ふ無我の界に至
ヤ也

中〳〵要なかゝ〳〵て或い「天地者萬物之逆旅光陰者百代之過
客」にゝゝ「正月ゝ冥土の旅の一里塚」なれい斯く居ゝも正〳〵旅行
も家ゝも此道理を未の松山と〳〵越ゝを能ふまゝ然れとも余い
猶強て旅行を勧む何となれい見事に聞ゝる一種の意想を一隙
皇張せむゝ全く意味なき妄語となゝ事往〳〵ある例にて此人
世を旅とせゝも遂に人世の影を巧に譬喩せゝゝに其実相
を云ふゝもゝとならされいく抑も実相い常に影を放てで影ゝ常
に正当に其実相に添いさゝ事望月の冴えゝ影盃中に指
ゝ如〳〵若〳〵譬喩をなてせい人ゝ屠者の如〳〵鸚鵡の如〳〵と云ふ
も不可なかゝ〳〵と雖も人い自ゝ屠者鸚鵡と云さゝい何故ゝ
人い所謂神仏を到ゝ處にて拝〳〵得きに遠きを厭いで徒勢

身近高野善光寺果て鷲峯に行きて捨てまゝに何故ゝ胸
間に十字形をかくゝゝ何故ゝ若し此等の疑問を考へ石に此世
を立去りの旅こゝとせゝゝ正しく其到達の地を此世の外即ち冥界の
死に止めるゝ事を楽しむ旅行こゝ譬へゝ事の人世の実相に適へ
ゝを知らに至ゝ〳〵又真理い天下の共有物ゝとゝ素より知ゝ所ゝも
れい余ゝ求めゝ真理こゝと信せゝ説と旅行せでい真趣味分らじなど、
狭く限ゝを欲せねど人世の実際ゝ思想ゝ観念ゝと劇場ゝもゝ時に
多〳〵又其れを修験まゝ疲少はきり止を得ず狭めぬいなりぬゝ
如何に世人実に拙言せゝ人間ゝ生れていろは糸犬と習ふゝり
死ぬゝ古代より堆積し来れゝ学問風俗習慣等に一生涯を費
し終ゝと常まゝゝもゝから自ゝ間接ゝ観察思考に出て熟達
もせめ直接にゝ代潤ゝを免れず日夜枯燥せゝ書冊を多

く讀ゝ多く知ゝゝ人い此世の主働者ゝなり安内者ゝなりゝ人
心を收攬せゝ者ゝを思い真理卓説ゝ云い古人の冠辞
を有せゝを実際ゝゝと思い人の物ゝ我ゝ物ゝ人の思想ゝ我ゝ思
想ゝ境界益ゝ曖昧ゝなり遂に独得ゝ創見ゝ讀ゝ得し標本も
見えにくくなりけゝも姑しむに見らさゝて試に史を看よ高遠深大の
理い多く直接に造化に面せゝ古人に多く発見せられゝ吾人い皆其
を復習記憶せゝ器械に外ならざゝにゝ敢ても之を厭い若
し此人界より脱せむゝ死を覚悟せゝゝらに如し死に至らもとも
ゝも祖先い来ゝ遺伝性全脳を支配し到底脱し得せゝゝ此
球い空氣にゝ生ゝゝ者月球に行き能いさゝゝ加けん余今斯く
云ふとて厭世家ゝは見玉ひそ決して石世に大詩人なゝと断せゝマウ
コーレーに倣いりゝは見玉ひそ今世ゝ漢学ゝとて只管に王王五

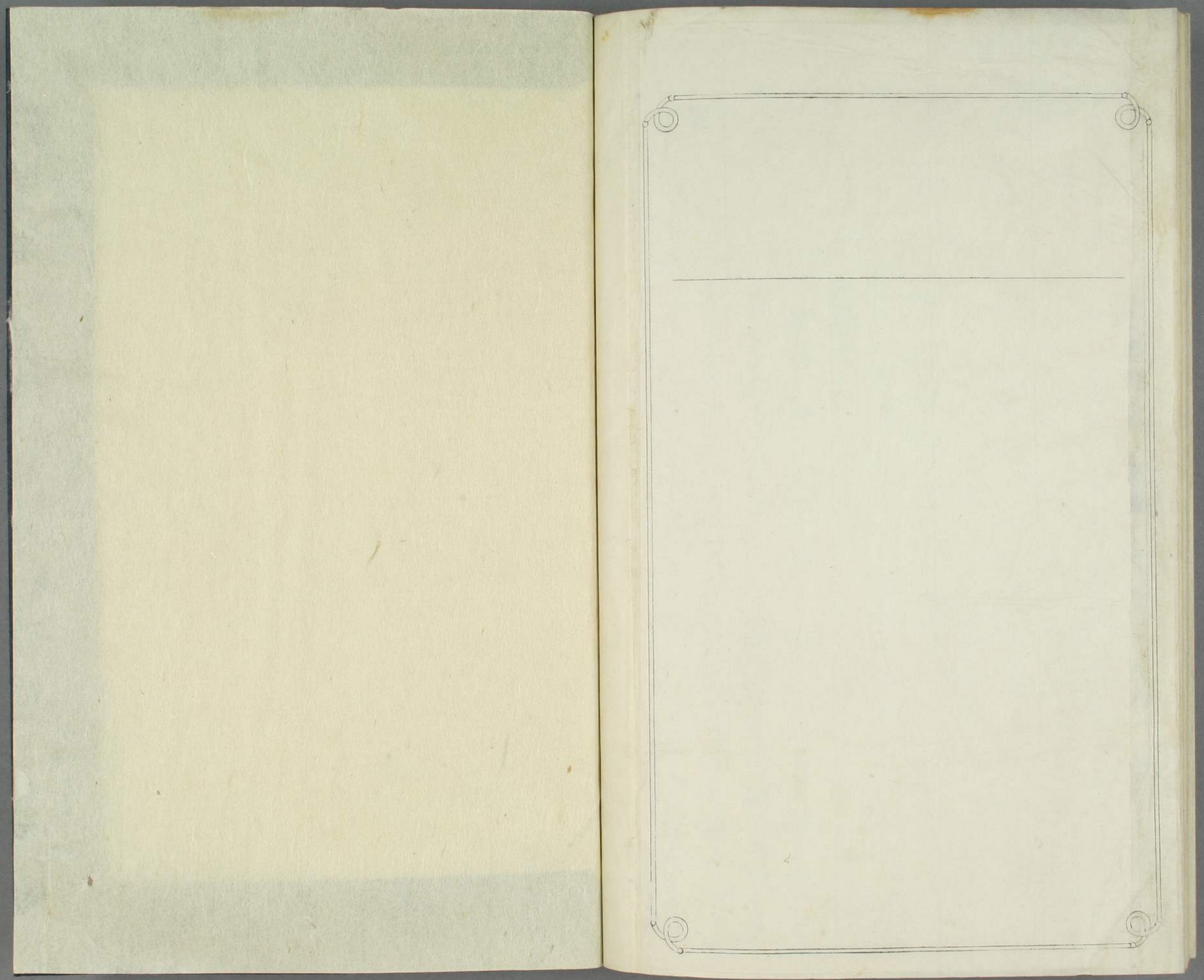
帝と墓ふ支那人の子孫なりと見まふ如く余は今人の能力を
雨と降らし雪を降らし氷を造るに堪ふるを認むるに地球の上部
より底と空より亜細亜亜米利加西洲の人往復するに至るも数年
の后にあらずと信ずるに世界中の言語を字書中に牧む人其を
計算する人記憶する人等生むと信ずるに又二十世紀にも至らず
必ずや蓄音器に改良を加へさうの発見せられ人の一書冊を讀
まずとも何時にても此機械により用を弁ずるに至り学校は此器械鍊
修所と化するに至るべし知らずと思ふ者も此世を実際さなら
むるも余の所謂自然にして最も純潔に高上の興味ありて
清爽の心地せらるゝ旅行も好飲と共に好人と好人なきに至り
むるが幸に未だ来らざる時代に生まれる内より余は奔なれ
扨余の旅行を勧むるは旅途にて思ひ寄らぬ真理の遺物多

敬服

くあるを様に思ふ故なり一例に崇高優美の景象に満て
旅途に於ては人多く装飾さる真相を現ずる又人と対せる時と
異にして全く人類の付表者たり直に造化に接する事者
モゼズのシナイ山頂に神に逢ひ造化より得る一問一答片
言隻語及び感覚を人類一同に授けりとせれば受納せるものにて
人性にも普遍人世にも永劫のものなりと云ふ然れども造化より
直に受けしものは概ね意味深遠なる詩の如くこれを解釋し
之を悟入せんと苦心して其人に由ふ若し一度此具有普遍的
の神秘を悟了せむら宇宙の萬象に一貫せる妙法を悟入し
兼ねて人生の真相に徹透せむと釋迦と我れと等しかるべし
云ひ換へむに旅途に上りて天地の景象に接せるを取て直ちに人世
を回観し観察せむよ適当せる地位を得たりと云ふに存り之

浙三十余枚の長論文其根本とする趣旨簡単に對し心を洗ひ造化と融化すとあり其特説く所は引例正論に對しては頗る同じ趣意もの多けれど全体として試験の外に在る唯ゞ与へたるを思ふ段多くして短文の割合に不相応なる甚だ要領を得ず

ハ余の直接と云へる意味にして人若し氣候の変化ハ
に定められぬ都に默りも間接に古人の枯燥せる書冊をのミ便れ
る時ハ其感覚せるもつるまゝ実驗を經さる知識となる前者
ハ誤く故に其人の解し様にて二つの差別を生ず例へハ其解釋正
しからざれバ或ハ古人未究の真理独得の創見をも棄却し人世の真
相をも達観し得べく非ずむバ偏固不通の人となり終るべし而し
て后者を譬へれハ味ひある事なき食物の料理法を暗んじゐるか如く
其食物に遭ひハ料理する方法に困しまざるべしと云も一生中或ハ
其真物を見ることなくして終るもあるべく偶ゝ見るも其を見誤
ることありぬべし宜なるかな弘法大師西行法師一休和尚等の一
生を雲水に送れバ想ふに此人々の所謂造化に到る處融合せ
る者にして其人生を掌中に見るを得しも皆旅行よりの結果なる

文章の芳潤を與ふる之句時に調子を欠ける嫌あり八瀬は冗長に流れて文章の華やかなるハ今更云ふべき様もなし

も山怒り川激さるべし鳴呼造化の真相ハ旅途に於て見
得らる、卑し猶緑なる柳紅なる花の間より都を見得るか如く
紅葉せる満山の中に真青なる緑滴るる松樹を見得るか如
く暗夜を破つて東峯に出でたる一輪の明月を見得るか如しと
云ふべし